

清泉カトリック センター便り

第22号
平成28年
12月1日

【編集・発行 カトリックセンター】

今月のみことば

「言（ことば）は肉となって、
わたしたちの間に宿られた。」
（ヨハネによる福音書1章14節）

神のために わたしにできる 一番すばらしいことは、
み旨にすっかり自分を委ね
どんな妨げも 置かないこと。
—聖ラファエラ・マリアー

降誕祭(Christmas)



コレッジョ 幼児を礼拝する聖母
ウフィツィ美術館（フィレンツェ）1524～26頃

「あるクリスマスの出来事」

佐久間彪訳詩

ルイス・カッセルズ作

老いた ひとりの農夫が
ゆり椅子に 身をゆだねて
暖炉の火を 見つめていた。

遠く 教会の鐘が鳴っている。
クリスマス・イブ。

かれは もう長いこと
教会に背を向けて生きてきた。

「神が人間になった、だと？
ばかばかしい。
だが、 そんなことを信じるものか。」

眼を閉じ、 薪のはじける音を聞きながら
かれは まどろみかけていた。

突然 窓ガラスに 何かがぶつかる烈しい物音。
それも次々に、 さらにさらに烈しく。
何事かと、 かれは身を起こした。



窓際に立つて 見たものは 音も無く雪の降り積もる夜闇の中に
この家をめざして押し寄せてくる おびたしい小鳥の群れだった。

雪闇に わたりの途を誤ったのだろうか 小鳥たちは ともしびを求めて
ガラス窓に次々と打ちあたっては むなしく軒下に落ちていく。

かれは しばし呆然と その有様を眺めていたが 外に出るや
雪の降り積もるなか 一目散に納屋へと走った。

扉を大きく左右に開け放ち、 電灯を明々と灯して
干し草をゆたかに蓄えた暗い納屋へ 小鳥たちを呼び入れようとした。
彼は叫んでいた。 「こっちだ、こっちだ、こっちへ来い！」

しかし、 はばたく小さい命たちは かれの必死な叫び声に応えず
なおも ガラス窓に突き当たっては死んでいった。

農夫は 心のうちに思った。 「ああ、わたしが小鳥になって、 かれらの言葉で
話しかけることが出来たらなら」

一瞬 かれは息を飲んだ！ かれは 瞬時にして悟ったのだ。
「神が人になられた」ということの意味を。 かれは思わず、その場にひざまずい
た。

今や、 人となり給うた神の神秘にみちた愛が ひざまずく老いた農夫を静かに被
い包んでいた。

かれの上に降りかかり 降り積もる雪はそのしるしとなっていた。
「わかりやすいミサと聖体の本」 白浜 満著 P24から P28 女子パウロ会
クリスマスは「神が人となられた」ことの神秘を祝う日です。

クリスマスおめでとうございます。